

2022年11月20日 聖餐式説教

教会の暦は、降臨節に始まって降臨節前主日で終わりますので、本日は教会の暦では1年の最後になります。そういうわけで本日は収穫感謝日に定められ、この1年主より頂いたお恵みを感謝するのです。

教会の暦は3年で一回りしており、本年はC年でありました。C年は主として福音書はルカによる福音書から学ぶことになっておりました。ちなみにA年は主としてマタイ、B年はマルコから学び、ヨハネは祝日や復活節に学ぶことになっております。この1年皆様と共にルカによる福音書から学んでまいりましたけれども、本日はルカの伝えた福音全体について考えてみましょう。

ルカは主イエスのお弟子さんではありません。パウロは手紙の中でルカのことを愛する医者ルカと呼んでおりますので、医者を仕事にしていたようです。

ルカが福音書の中で私たちに語ったのは、主イエスはこの世の最も低い者達の真の友となられたということでした。主イエスの誕生物語の中に、羊飼い達が野宿しながら羊の群れの番をしていたときに主の栄光が現れて主イエスの誕生が知らされた記事がありますが、当時の社会で羊飼い達は最も身分の低いものとされておりました。その人達に主イエスの誕生が一番先に知らされたということなのです。また主イエスの教えの中に有名な山上の垂訓があります。その同じ教えをルカは山をおりて平地で語ったと言っております。これは同じ教えからマタイは権威を私たちに伝えたのに対して、ルカは貧しいもの、蔑まれている者に天国が一番近いことを示されたと伝えているのです。また主イエスが12歳になったときの話や、よきサマリヤ人の譬話、背の低かったザアカイの話、放蕩息子の話など、他の福音書には見られない、主なる神の愛に満ちた姿を伝えています。

昔イスラエル最大の王ダビデが主なる神の前に罪を犯しました。ダビデは預言者によって罪を指摘されますとそれを率直に認め、悔い改めました。「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を神よ、あなたは侮られません」。これは詩編五一編一九節にありますダビデの悔い改めの言葉です。

本日の福音書の箇所は、主イエスが十字架にかけられた場面の話です。主イエスが十字架にかけられたとき、二人の罪人が一緒に十字架にかけられていた

のはすべての記者が語っていますが、大半が二人とも主イエスを罵ったと書いてあるのに対し、ルカはその一人が主イエスを救い主と認めたという、大変興味深い記事を書いています。そして主イエスはこの人に、パラダイスの約束をお与えになりました。この物語は、悔い改める者を主なる神は必ず受け入れてくださることをはっきりと示しています。天国の座は、完全無欠なもの、罪を一度も犯したことのない人にもみ与えられるのではなく、主なる神によって選ばれて悔い改めて従うものに与えられるのである。天国は私たちにも入れる道を主イエスは備えて下さったと言っているのです。この世で最も低い者の友となられた主イエスは罪人にも天国への道をお示しになったのです。ルカはこうして主イエスの愛を示されました。そして本日は、この1年主イエスを通して与えられた主イエスの愛を振り返り、お恵みを感謝する日です。ルカが福音書を通して示した主イエスの存在を振り返りつつ、1年のお恵みを感謝する日なのです。来週から教会の新年を迎えるに当たり、ルカを通して示された主イエスの愛の姿を、よく心に刻みたいと思います。